わが街わが故郷

日本ピローブロック株式会社
和歌山工場と紀の川市粉河

1．会社紹介

社　名　日本ピローブロック株式会社・和歌山工場

住　所　和歌山県紀の川市粉河659番地

連絡先　0736-73-7050（代表）

URL　www.fyhbearings.com

和歌山工場

1953年、当社は日本で初めてピローブロック（転がり軸受ユニット）の製造・販売に着手し、以来、ピローブロックの専業トップメーカーとしてグローバルな企業活動を展開しております。創業時より「品質第一」を企業理念とし、高品質の製品を提供することに全力を尽くしてまいりました。また、時代の変化を先取りし、あらゆるユーザーニーズにお応えできるよう、常に先進技術にチャレンジし、セラミックスなどの高付加価値軸受を素材から一貫して製造するなど、省エネルギー・省資源・地球環境に配慮した製品作りに邁進しております。

和歌山工場は、和歌山県が県政の活性化と地域の発展を図るために和歌山県の誘致企業として昭和63年11月に操業を開始しました。当社の品質方針は、「**妥協を一切許さない　顧客満足の追求**」の言葉どおり、製造工場であるかぎり品質のよい優秀な製品を製造するのが使命であります。よって、2005年度和歌山工場の方針として以下の３本柱として鋭意努力しているところです。

１．JIT供給の確立：JIT（Just in Time）

必要最低限の在庫を保有し、急激な需要変動にも柔軟に対応できるジャストインタイムで部材をラインに供給するシステムの確立

２．TPM活動の推進：TPM（Total Productive Maintenance）

故障や不良などの設備ロスやムダを徹底的に改善し、設備効率を最高にする「全員参加の生産保全」活動を推進

３．QC活動の推進　：QC（Quality Control）：品質管理

「買い手の要求に合った品質の製品を経済的に作り出すための手段」を統計的手法などで合理的に行う活動を推進

和歌山工場の生産を支える製造ラインでは、当社独自の先端生産技術を集積し、鋼材から完成品までの生産を全自動制御しており品質管理

の徹底を図っています。また、軸受仕上公差もJIS規格以上の厳格な社内公差を採用しており、高精度軸受として高い評価をいただいております。当社は、和歌山工場の他に国内では、本社工場（旧美原工場）、海外では中国NPB有限公司工場（秦皇島市）による３極生産体制を取ることで生産効率を高め、トップレベルの製品供給能力を保有しております。

沿革

1950　堺市中百舌鳥町にて「小林精工株式会社」設立。

1957　「日本ピローブロック製造株式会社」に社名変更。

1969　販売部門を分離、「日本ピローブロック販売株式会社」設立。

1988　日本ピローブロック製造株式会社・和歌山工場設立。

1992　中国現地法人、「秦皇島恩彼碧軸承有限公司」設立。

2000　ISO9002認定取得。（2003年に、ISO9001認定。）

2004　製造会社と販売会社が合併し、「日本ピローブロック株式会社」設立。
本社を堺市中百舌鳥から美原町に移転。

2005　営業部大阪支店を大阪市西区より堺市美原町に移転。

２．わが街　粉河（現在：紀の川市）

《粉河について》

日本ピローブロック株式会社・和歌山工場は旧：那賀郡粉河町（現在の紀の川市）にあります。

昭和30年４月１日町村合併促進法に基づき粉河町・長田村・川原村・竜門村の１町３村が合併、同年７月１日王子村の一部大字井田・東野を編入。昭和31年９月30日鞆渕村を編入して、新粉河町が誕生しました。和歌山県北部の紀ノ川中流に位置する粉河は、北は和泉山脈が連なり大阪府南部と接近し南は紀州富士の名で知られる龍門山(756m)がそびえ、大阪市から約50㎞、関西国際空港から約25㎞圏内に位置しています。年平均気温が15.7℃という比較的温暖な気候であるため、みかんやはっさくといった柑橘類をはじめ、近年は桃や柿の栽培も盛んです。

関西国際空港を眺望できる展望台があるハイランドパーク粉河や西国三十三ケ所観音霊場第三番札所の粉河寺、紀州三大祭に数えられる粉河祭など、豊かな自然環境と文化資源を活かして「自然と文化・交流のまち粉河」をスローガンに、豊かな生活と活気あふれる町をめざしています。

《西国三番粉河寺》

山号：風猛山　　粉河観音宗総本山

御詠歌：父母の　恵みも深き　粉河寺　仏の誓い　頼母し（たのもし）の身や

本堂

粉河寺案内図

770年（宝亀元年）領主の大伴孔子古（おおとものくじこ）が風猛山で獣を追っていると山中で霊光に遭遇します。孔子古はこの地（現在の本堂の場所）に草庵を結んだと伝えられています。

この小堂に堂男大士（どなんだいし・子供の姿をした修行者）が一夜の宿を求め、孔子古の望んでいる仏像を７日間で刻んで姿を消します。その仏像は、金色に輝く千手観世音菩薩（本尊）になったといいます。孔子古は堂男大士こそ観世音の化身と考え、以後、殺生をやめ供養礼拝したといわれています。この草創の縁起は「粉河寺縁起（国宝）」という紙本著色絵巻に描かれているそうです。

粉河寺縁起絵巻

鎌倉時代には七堂伽藍が整い、以後隆盛をきわめますが1585年(天正13年)、豊臣秀吉の紀州根来寺攻めにより、粉河寺も全山焼失し、現在の堂宇は江戸時代の再建が多いそうです。また、庭園は桃山時代の枯山水の庭園として名高く、国の名勝として指定されるなど、日本庭園の中でも先例のない様式となっています。紀州産の名石を使った独自の石組みと、その上の植栽樹の配置、巨石を十分かつ自由に扱っている豪快さが特色です。本堂の前庭とその広場との高低差を処理する土留めとして、また、広場から本堂を仰ぎみる前景としての役割を担っています。

《粉河祭》

紀州三大祭のひとつである粉河祭は、粉河産土神社（丹生社）の産礼で、毎年７月28日（旧６月18日）が祭日と定められています。（現在は、残念ながら粉河町民祭の一部として組み入れられ、７月の最終日曜日と決められています）

粉河祭

祭礼は神社につきものの行事であるから、粉河祭の起源ということになると、丹生社が開始された延暦年間（平安初期780年頃）ということになります。丹生社は大伴船主が丹生明神を父大伴孔子古が創始した粉河寺も守り神としてその側にお祀りしたことに始まっています。丹生明神とは、郷土の明神といわれる丹生都姫尊のことであり、天照大神の妹神にあたり、またの名を雅日女尊とも呼ばれています。

享禄年間にいたり戦乱のため何度か途絶えましたが、1585年（天正13年）猿丘城主藤堂高虎によって再興されました。これは天正13年３月の根来征伐により粉河寺も運命をともにしましたが、戦後の治安維持、粉河復興の手段として祭礼が復興されたものと思われます。

現在行われている御渡式（一般にお渡りと呼んでいる）などの形式をとるようになったのは、おそらく室町時代（1338～1573年）からであろうと言われています。しかし、それ以前にも神輿などの形の祭礼が行われていたことは確かであり、住民も相撲などを奉納して参加していたと考えられます。

御渡式は大伴船主が坂上田村麻呂将軍の奥州征伐に出陣し、軍功をたて祖神の捧げ凱旋した

御渡式

ときの行列を再現し伝えたものだといわれています。紀伊名所図絵に御渡の模様が詳細に載せられており、現今の御渡式もほぼこれに近い様式です。(残念ながら現在は２年に一度となっています)

同じく紀州三大祭のひとつである和歌祭は、初代紀伊藩主南龍公徳川頼宣により由緒深い粉河祭を模して創始されたといわれています。

1593年（文禄２年）から大鳥居坂（現在の粉河駅前付近）のお旅所へ渡御するようになり、この頃から名物の山車（だんじり）がにぎやかなお供をするようになりました。

昭和20年頃（上）、25年頃（下）

山車は車楽、または檀尻とも書きます。粉河祭本来の中心的行事は御渡式ですが、住民側から祭を喜び、その楽しい雰囲気を盛り上げるのは何といっても山車であり、現在は御渡式が２年に一度の行列となっていることからも「粉河祭イコールだんじり」というイメージが定着しつつあることは確かです。

山車は、明神に献上する灯籠ともいわれ、太陽神の信仰の象徴です。元来はひげこの下に大傘があり、次に大行灯を掲げ、昼は傘幕、行灯幕、そして屋台幕と３段に幕を張り、夜は行灯に火を入れ傘の軒先には長提灯を屋台２階に前後枠提灯、屋台の軒には長短の提灯全てあわせて100個以上の提灯を飾り運行します。近世になって粉河町は在郷町として17の町並（北町・橋詰・中町・南町・天福前町・這上り町・石町・竹屋町・小堂小路・鍛治町・裏町・奥の小路・根来小路・加羅陀山・蔵の垣内・上の段・新町）が成立していました。そして祭礼には12ばかりの山車が運行し粉河祭に一層の花を添えることとなります。

本祭り

宵祭り

神輿

《粉河のこれから》

平成17年11月7日に「元気で安心、自然の中で、交流の輪がひろがる、文化創造都市」として那賀郡の5町が合併し、新生、紀の川市と改め誕生しました。

- 旧粉河町（粉河寺）
- 旧打田町（パラグライダー）
- 旧那賀町（華岡青洲）
- 旧桃山町（桃源郷）
- 旧貴志川町（ほたる）

面積は228.54㎢で、和歌山県の約5％に該当します。また人口においても和歌山県で和歌山市、田辺市についで3番目の市となります。

市としてはまだまだこれからで12月11日には紀の川市長・紀の川市議会議員（30名）が決定し、これから新市として生まれ変わります。

霊峰竜門山が紀ノ川に映え、霊場西国三番粉河寺の門前町として栄えてきた長い歴史と伝統ある文化を持つわが粉河は、六か町村合併後三十星霜を迎えた今、われわれは歴史ある紀北の中心都市としての自覚を持ち、新世代への飛躍のため見守っていかなければならないと思います。

（和歌山工場長　坂本 享広）

参考資料：粉河町、粉河寺、山車第壱番天福町 各ホームページ